

でもなく、本書の良いところも、足らざる点もすべてだれよりも著者自身が一番よく知つていられることであらう。

本書が世に出るまでの経緯については後記に書いて居られる通りであるが、わたくしは

往年の立命館出版部のような出版機関が立命館大学の事業として再開されることを、この際切におねがいしたい。

わたくしは鈴木弘道氏の今日のしあわせをともによこびとしたいのである。

A5判 四五二頁 初音書房 (京都市)
東山区三條通白川橋東五丁目 昭和三年三月刊 三五〇部限定 一三〇〇円
— 三五・四・二五 —

堺光一君の「上田秋成」をめぐる饒舌

村 田 穆

作家論は恐ろしい。自分を語るに他ならぬからです。もともと、文章を書くといふことは、自分を語ることなのですが、就中、作家論は、その極るところと言へませう。

その作家を自分が撰ばねばならなかつた必然性、その作家との血みどろの戦ひ、そこに何を見出し、何を学びとつたかを、生々と語るところに、作家論は成り立ちませう。

近頃は、一寸した伝記書ブームの感がありますが、多く、ありきたりの材料と月並な見解をやりくりしただけのもののやうです。

堺君は、序説でかう書きます。「今日、現代を考える時、文学といい、思想といい混沌

として迷路に踏みこんでいる。否それ以上に人間存在についての深い悩みがわれわれ全体の上を覆うている。今日ほど、真実な人間倫理そして新しい思想と文学の創造が待望されている時代はほかにないであらう。この時にあつて、二百五十年前の危機の時代を不屈に生き抜いた秋成が、自身の苦悩と時代の危機の中で如何に自己を追求し、如何に現実を生き、如何に思想し、そして如何に文学したかということを探つてみることは意義深いことである。このような意味で秋成の人間像、思想、文学の歩みの過程を考えてゆこうと思ふのである。ところで私は秋成の文学及び思

想について性急な本質論を、てつとり早く語ろうというのではない。私は、まず、このような歴史の劃期であつた時代の中で、秋成の主体性としての個性が如何にして形成されていつたかを、歴史的な現実と対応させながら、事実の上から語つてゆこうと思ふ。そして次第に秋成の本質論におよぶこととする。」(一三頁—一四頁)

現代を二百五十年前に対比し、秋成の追求に自分の生き方を探らうとした堺君の、熱っぽい傾倒が、まづ此の書を凡百の秋成論から区別するのです。どの一節を切りぬいても、大ていは堺君の生血が噴き出すのです。

さて、本論では、第一章で、「人間としての秋成」が論じられます。彼の生涯を分つて、「『浮浪子時代』」「『国学者時代』」「『狂蕩者時代』」とし、「その大きな差異を端的

というならば、青年期においては放蕩生活であり、壮年期には學問に専念したことであり、老年期に至つては、もつぱら秋成的世界の追求に終始した」(一六頁)といふのです。

それにしても、「大切なことは秋成が不遇な生涯とはいへ、また数奇な運命を背負つたとはいへ、決して、時代の敗者でも、また運命に破れたというのでもなかつたことである。そのみか、不遇と戦ひ時代におもねず、しかも自己をいつわらずに、不屈な精神をもつて、生涯を生き抜いた人であつた」(一七頁)といふところに、君の秋成觀は端的に打ち出されてゐると言へませう。

ところで私は、この章の内容を詳述するかはりに、君の態度に触れておきたいと思ひます。国文学界といふところは、まだまだ素朴な風が強くて、作者の言ひ分だと、鵜呑みにし勝ちなのですが、近世ともなれば、作者は複雑な性格をもつて来て、まともに物は言ひません。堺君は、そこを承知してゐます。例へば、「浮浪子時代」を形成する秋成のしほしは言ふ「放蕩」を「文字どおり受取ることではない。そこには文飾の配慮がうかがわれるのである。」(三〇頁)としたり、妻た

まが尼となつた時、秋成は「珊瑚」と名を付た。いかにと問た故字はまゝの皮じや、コレコレと呼ぶに勝手がよきじや」(胆大小心録)と書くのを、堺君は、珊瑚の出所を論語に求めて、「珊瑚とは中国では玉のことである。秋成は妻たまの名である「玉」を中国説みにして「珊瑚」とし、それに「コレコレ」を掛けて名づけたものと思う。とまれ尼形になつた妻に秋成ははじめてその器量を感じたのであつた。」(八四頁—八五頁)としたり、秋成の韜晦の言にたぶらかされないので、見るだけのものはちゃんと見てあります。

第二章「秋成の思想」では、それ「を論ずる場合、国文学、史学、歌学、国語学、音韻学、医学、洋学、および茶道の祖述とその他広範圍にわたつて研鑽を重ね、ひろい視野に立つて真理の探求にとりくんでいることを考へねばならない。」しかし、かかる寛政期第一流の知識人秋成を特色づけた思想とは何よりも国学をおいてのほかはなく、「しかし「国学は」「秋成独自の見識をもつ国学であつたが故に、秋成の思想の本領は秋成の国学を中心として述べてゆくのが適當である。」(一一六頁—一一七頁)との立場がと

られます。評論なら、「雨月」なり「春雨」なりを撫でまはすだけで、事足りませう。が、學問なら、その根を洗はねばなりません。その學識の多岐で思想の根深いところに、秋成の文学を解き明かす難しさがあるのです。學者の、生涯をかけてなかなか及ばぬ所以です。堺君は、「やや説明にすぎざるきらいがあるが、」と前置きして、「先ず国学誕生にいたる封建思想の潮流と秋成国学におよぶ国学の系譜を」「洗」ふこと(一一七頁)からはじめて、秋成の「本質となつた人生觀」を「狂蕩」におき、それは、秋成が「檣の柚」や「自伝」や「藤簍冊子」や「文反古」などに繰り返した以上に、堺君の繰り返し熱く説くところですが、「秋成の狂蕩とは」「自己にいつわりなく純粹に生きるという」「人生態度」で、「俗惡にさからい、虚偽をきらい、私智策略に反する、つよい反俗精神と批判精神があつたので、」それゆゑに、「狂蕩」は「国學上の合言葉としての「直き心」と「同じ精神であり、同じ本質であつて、」かく「秋成が自己の人生觀と學問の見解とが相分つことなく緊密に一つのものであつたが故に、そこに特異な国学が

生れたとともにこれらの自覚がただちに文学意識に結びつき高まつてゆく契機があり」、「そしてかかる自覚なり文学意識の表出が、宣長一派の国学者と対立する学説となり、また生活態度となつて浮浪子となり、文学創造となつた。」(一四〇頁)といふのです。

次に、第三章「秋成の文学」に移ります。まづ、「世間猿」と「妾形氣」とについては、第一章の方に引用に都合のよい要約があります。この二作の「秋成の氣質物」「には先蹤の文芸の方法や様式をふまへながらも、」その中にすでに秋成独自の人間追求が微弱ながら試みられており、従来の文芸の方法や様式を打破して、自己の文学意識を表現しようとする文学創造の身がまが現われ」てをり、「説話のとり上げ方においても、つねに徒勞に終る不運な民衆に目をそそいで、当時の失われてゆく町人生活になんらかの可能性を見とけようとする文学の態度があり、」かうした「氣質物を書いたことにより、一つはその低俗性を認識してこれを嫌悪し、同時に現実を写実することにより現実をより深く認識し文学意識を高めていつて、ついにその氣質物も克服し訣別した。」(四二

頁―四七頁)とあります。

「雨月物語」は「現実への反逆精神の形象化で、」「反逆の精神化が靈界や幻界において、苦悩を解決し、自我を貫徹するので、」「そこにはきはめて浪漫主義的な内容をもつて詩的感情の興奮をよりあげ、日本独特な世界にもまれな怪異小説を創造し」たのみならず、「近代文学の散文の様式がきざしではあるが発見される」といひ、更に「要するに『雨月物語』は氣質物から作家的に転身をして人間を第三者的に傍観するのではなく、一歩進んで人間の魂の奥底をのぞこうとしたのである。そしてそれは秋成の初期の文芸『氣質物』と晩年の文学『春雨物語』の人間追求の過程に生まれた作品であつた。」(二〇六頁―二〇七頁)

最後に、「春雨物語」について、「十篇はすべて、直き心の純粹な人間」の物語で、その「幸不幸は」「問題でな」「くうけ得た資質を心直く十分に生きることであつた。」「そこには儒教仏教の教理をまつたく空論として排斥された人間中心主義が論じられ人間の自主性が強調されている。そしてその自主性なり真理の追求に自由討議の精神が主張さ

れたのである。この自由な人間存在の肯定は封建的惡について執拗に追求してゆく、そして惡は單に惡ではなく、惡にも強く、善にも強く、直く強く生きるところに悟りもあれば救済もあると主張したのであつて、人間は人間以上の何者でもなく、又人間以下の何者でもない。人間と生れて、人間らしく生きよと語るのであつた。」「つまり小説の中に批判精神をもつて、人間の本質を探索し、知的操作によつて人生の眞実を浮びあがらせて、積極的な倫理形象をとらなつた近代性ある文学作品であつた。」(二六七頁―二六八頁)と結ばれます。

以上で、杜撰な内容紹介を終わりますが、少々気になるところもなくはありませんので、揚げ足取り染みですが、若干そこらに触れてみます。ところはすべて、堺君が根から確かめた秋成のことではなしに、周辺のことで、それゆゑ、つひ気軽に俗説をそのままもちこんだところで、それだけに、本質的な瑕瑾ではありませんが、そこだけがひどく目障りなのです。

その一。蜀山人が「世の中はかほどうるさきものはなしぶんぶんぶと夜もね

られず」(傍注が通説)と詠んだといふの(八一頁)は、「甲子夜話」などにも見える説ながら、これはその筆者松浦静山に狂歌と落首の区別がつかず、高名の狂歌人に下等の落首を附会した俗説を代表したまでのことで、蜀山人自身「一話一言」に「是大田ノ戯歌ニアラズ偽作也。大田ノ戯歌ニ時ヲ諱リタル歌ナシ。落書体ヲ詠セシハナシ。」と言ひ、それより先きにも「江戸の花海老」の中で「かりにも落書などいふ様な、鄙劣な歌をよむ事なき」と言ふ見識からも、誤説と見た方がよいでせう。

その二。西鶴の「諸国はなし」の「忍び扇の長哥」を「封建倫理に命を賭けて反抗した(一二四頁)」といふのは、これも見当違ひの俗論で、これは当時の町女房の結婚道徳が確立してゐなかつたので「女の一生に男は一人」といふ根本法則を確立しようとして、物語を上流の女性に托し、町人の事大根性にうつたへたものであることは、西鶴の諸著作の用例に照らして、明らかです(拙稿「再説忍び扇の長哥」愛媛国文研究第八号所収)。

その三。「妾形氣」の「やあらめだや元旦の捨子が福力」の結末の「三人が丸くおさ

まる話」と西鶴「懷親」の「昔知つた寢所」の「先夫が妻と後夫を殺し、自分も自殺して相果てるといふ固苦しい結末」との違いを、「時代の隔り」(一八九頁)と解してゐるのは、むしろ、態度の相違と見るべきでせう。「妾形氣」の解決は、氣質物といふ戯作の線に沿つたところなので、「雨月」や「春雨」の如き態度なら、むしろかうはありますまい。同一作家が同時に書いたとしても、週刊紙の作と文芸誌の作とは、同様に論じられぬと同じでせう。

その四。西鶴「本朝二十不孝」の「大節季にない袖の雨」と「樊噲」との比較も、西鶴については當つてゐません。「咄」の態度といふのは、近頃無暗に拡張解釈がなされますが、西鶴のこの咄の教訓めく口吻から、「古い封建倫理から完全にぬけきらぬ」(二六三頁)といふ指摘は当りません。西鶴は本文に描くごとく、人間精神のすさまじさを見てとつたのです。そこを見事に表現しておけば、西鶴の意は尽きるのです。あとは堺君の所謂文飾です。読者の求める結びを書き添へたまでで、それは西鶴の信奉する結論ではないのです。西鶴は自分の言ひたいことと同時に、

読者を考慮してゐたので、そこで、出版の対象となり得たのです。ところが、「春雨」にはそれがありません。秋成は、そこでは、自分のためだけにしか書いてゐないのです。「春雨」が識者に認められ数々の写本を残しながらも、つひに近世を通じて出版の対象となり得なかつた所以です。

以上は、微瑣で、再版の時にでも削れば片附くところで、秋成論の根本を弱めません。

これを要するに、従来の秋成論の多く「妾形氣」程度にとどまる中で、堺君の此の書は「雨月」程度の成果をあげたものと言へまう。それゆゑに、私は更に時を経て、堺君の「春雨」を完成することを望みたいのです。それには、はじめに指摘しました熱つばさから生れる、身に引きつけ過ぎて、いささか早急に一刀両断するところから脱け出し、今一度、距離をおいて秋成を見直すこと、時流に對するより広い視野、作者と読者との關係を考慮すること、国学を中心に秋成の思想を更に深く掘り下げること、その結果完成される堺君の「春雨」を私は切望するものです。隨を得た思ひで、蜀を望みたいのです。御自重御自愛を祈ります。(三十四年十一月記)